様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：31307
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22720011
研究課題名（和文）　認知的反省から実践的反省へ―哲学史における反省概念の変遷とその現代的意義の解明
研究課題名（英文）　From cognitive reflection to practical reflection. A philosophical research on the ideas of reflection and their influence on the contemporary theories
研究代表者
越門　勝彦　（KOEMON　KATSUHIKO）
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号：80565391

研究成果の概要（和文）：反省概念の変遷に関しては、フランス反省哲学の系譜をメーヌ・ド・ビランにまで遡り、反省の働きが、倫理的経験の一契機としてのみならず、音声言語の使用を可能にする条件としても捉えられている事実を明らかにした。さらに、価値の共約不可能性をめぐる議論のうちに反省概念の現代的意義を探り、自己の生を吟味する営みとしての反省は、価値基準そのものの問い直しをその具体的機能とすることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Concerning the ideas of reflection, I researched the reflective philosophy of Maine de Biran and revealed that reflection is considered by him to be an indispensable element for utterance and verbal communication as well as moral judgment. Concerning the influence on the contemporary theories, I examined the role of reflection in relation to the discussions about incommensurability of values and showed that it consist in analyzing the opposition of fundamental values.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・哲学，倫理学
キーワード：反省　記号　音声言語　メーヌ・ド・ビラン　ジャン・ナベール　価値　共約不可能性

１．研究開始当初の背景

哲学において反省とは、広義には、自己自身と関係する意識の働き一般を意味する。そして、「自己自身との関係性」というときの「自己自身」と「関係性」の具体的内容によって、「自己認識」と「自己批判」に大別できる。「自己認識」における「自己自身」とは、知覚、感情、信念、願望といった心理的諸状態であり、その「関係性」は純然たる対象認知である。他方、「自己批判」における「自己自身」とは行為主体としての人格的自己であ

り、「関係性」はなそうとする行為もしくはすでになした行為の是非についての吟味である。

「自己認識」としての反省概念は、「知覚していることを知覚せずに知覚することは不可能だ」と述べた J.ロックにまで遡ることができる。その後、カント批判の文脈でヘーゲルが、「物を知覚している意識を観察する意識」という反省哲学の構図に内在する矛盾を指摘した。しかし、「自己認識」としての反省概念は用済みになったわけではなく、自己知とアイデンティティをめぐる議論において新たな展開を見せる。シューメイカーがその先駆をなし、その後、Velleman、Frankfurt らが、より実践的な場面で「自己認識」によるアイデンティティの成立を問う。後二者は、人格の通時的な同一性ではなく、行為に臨んでの動機の統一性 integrity にアイデンティティの基盤を見出し、誠実さ sincerity、一途さ wholeheartedness、真正さ authenticity といった諸要素から動機の統一性の把握を試みている。

反省の「自己批判」としての側面がキリスト教の文脈を離れ哲学固有の主題として確立されたのは 20 世紀に入ってからである。そうした反省概念について考察した代表的哲学者は、ナベール（Éléments pour une éthique、1943）である。彼は、メーヌ・ド・ビランに始まり、やはり＜自己認識＞と反省を同一視していたフランス反省哲学に、いわば倫理学的転回をもたらした。自らがなした過去の行為を振り返りそこでの意図や動機の意味を問い質す営みを反省と規定し、その反省が規範性の源泉、倫理の基礎をなすと主張したのである。

これまで、メーヌ・ド・ビランとジャン・ナベールの研究を進めるなかで、両者がともに反省概念を自らの哲学の基礎に据えていながら、反省という言葉のニュアンスが両者の間で異なることは疑問であった。漠然と、ビランは「自己認識」として、ナベールは「自己批判」として反省を把握していることが推察されたが、確証を得るには至らなかった。そこで、両者の反省概念の相違点を明らかにすると同時に、主に英語圏で展開されている価値をめぐる倫理的議論において「自己批判」としての反省がどう位置づけられうるのか、その解明を研究目標に設定した。

２．研究の目的

従来は主に「自己認識」を主題としてなされてきた「反省 reflection, réflexion」をめぐる様々な議論を踏まえ、「自己批判」としてのその機能が人間の知的営みにおいて果たす役割を明らかにすることが目的である。

具体的には、次の三つの問題を考察する。

①18 世紀以降の哲学史において反省概念はどのような変遷をたどってきたか。

反省哲学はカントとビランという二つの源流を持ち、それぞれ独自の発展を遂げている。また、英語圏では、ロック以降、反省と人格同一性を関連させて論じる伝統がある。そこで、反省の観点から哲学史を読み解くという企ての第一歩として、フランス反省哲学に属しながらカントの強い影響下にあるラシュリエ、行為論において反省に言及したブロンデルの著作に取り組む。加えて、現代の英語圏の自我論ないし人格論における反省概念への言及についても把握に努める。

②何が反省および反省の成果に正当性を与えるのか。

反省を経ることによって倫理的判断が妥当性を増すということはいかにして保証されるのか。反省の正当化に関するこうした問題に対して、本研究は、自己批判としての反省を知的美徳として規定する徳倫理学のアプローチに注目する。人間の知的な営みにおける反省の意義を、それによって客観的妥当性が実際に獲得されるかどうかではなく、知的探求にとって望ましい人格的特性であるか否かという観点から検討する。

③何が反省を動機づけるのか。

反省は何をきっかけとして発動するのかという問題は、あまり注目されないが、現代哲学の様々な論脈で散見される重要な主題である。例えば、解釈学的反省をめぐるガダマーーハーバーマス論争は、反省を始動する要因に関する見解の相違に由来している。また、「良心」を触発する要因を自己内部と他者のいずれに見出すかをめぐるハイデガーとレヴィナスの現象学上の対立も、反省の動機に関する対立と言える。

ただし、この問題に関しては、本研究を予備作業と位置づけ、本研究終了後、本格的に取り組むこととする。

３．研究の方法

研究目的の①については、ナベールとビランに加え、時代的に両者の中間に位置づけられ、ドイツの反省理論も影響を強く受けたラニョーのテクストの精読を行った。これにより自己認識から自己批判への移行という自説のさらなる裏付けを試みた。

加えて、Charles Larmore の著作に集中的に取り組んだ。反省概念を「認知的」と「実践的」に区別して捉える Larmore の視点は、本研究の基本構想と共通する。したがって、その思想全体を体系的に理解し批判的に検証するなかで見出された有効性も限界は、本研究の方向付けとして大いに役立った

②と③については、反省を主題的に論じた英語圏の自我論のサーベイを行った。(当初は、プラグマティズムや解釈学の見解の検討も計画していたが、実行には至らなかった。)自我論のカテゴリーに分類されなくとも、反省概念が重要な位置を占めている議論（B.Williams、Ch.Taylor、R.Moran、Frankfurt など）はすべて研究対象とし、反省の捉え方を精査した。反省概念と徳倫理学の関係については、反省を一種の「知的美徳」として把握している W.Ransome の著作を参照し、美徳の獲得を目標とする倫理思想の系譜への反省概念の位置づけを試みた。

４．研究成果

（１）初年度は、自己批判としての反省概念の可能性について考察した。その概要は以下の通りである。

ある個人にとって重要な価値とは、様々な選択の場面において一貫して判断の基準となるものであり、その意味では個人はその価値に自らのアイデンティティを託していると言える。だが、そうした価値への忠実さは時として独善と化す。

本研究では、ナベールの反省概念を参照しつつ、反省の役割は、独善に陥ることを避けるべく価値の妥当性を問うところにあること、そしてその問いが独自の構造を有していることを明らかにした。独自の構造とは、第一に、自らが信じる価値への根本的な問いのきっかけが、主体的に問うというよりは問いかけられるという受動的経験でありうること、第二に、問いに対する答えは単純な二者択一ではないこと、である。

本研究の独自性は、ナベールを中心としたフランス反省哲学に依拠して反省の＜自己批判＞としての側面を明確にするという点にあり、その目的は概ね達成されたと思われる。

成果は、共著『哲学への誘いⅠ　哲学の立ち位置』所収の論文「倫理に向かう哲学」にまとめ、発表した。

（２）価値の共約不可能性をめぐる現代の議論との関連で反省の役割を問うた。その概要は以下の通りである。

まず、善き生や社会規範の根拠となる根本的価値は相互に還元不可能であることを示し、一個人の内部でそのような価値どうしが衝突したときにどのような解決が図られうるかについて考察した。自己の生の吟味としての反省は、自分が選択や行動の根拠としている何らかの価値に対し、別の価値をオルタナティブとして対置するよう働く。そこで生じる異質な価値の衝突を個人が合理的に解決していく過程も反省と捉え、その過程に含まれる諸契機を分析した。

科学哲学や政治哲学の文脈で論じられることの多い共約不可能性について、価値論の文脈で、かつ個人の選択の場面に定位して、共約不可能な価値の衝突がどのように解決されうるのかを考察した点に本研究の意義と独自性がある。

成果は、論文「価値の共約不可能性と選択」にまとめ、発表した。

（３）フランス反省哲学の源流に位置するメーヌ・ド・ビランの反省概念を、言語的記号の獲得・使用におけるその役割に注目して考察した。その概要は以下の通りである。

発話と痛みの叫びの違いは、一つには、前者は意志的であるのに対し、後者は意志と関わりなく思わず発してしまうものであるという点に求められる。では、その場合、意志的とは何を意味するのか。メーヌ・ド・ビランは、その記号理論において、叫びを自然的記号、制定された言語を意志的記号と呼び、そうした言語使用が意志的であるということの内実について考察している。この記号分類は、コンディヤックの分類を基本的に踏襲したものである。だが、コンディヤックが記号と指示対象の結合様態に注目して叫びと発話の違いを自然的と人為的という対比で

規定するのに対し、ビランは、両者の本質的差異を意志的であるか否かという点に見いだし、声が記号として機能するための条件を、それを生み出す身体運動の意志的性格として提示する。発話は単なる身体運動ではなく、言語活動である限りでの身体運動である。それゆえ、言語活動を可能にする条件としての意志的性格が問われる。

ビランは、自然的記号から意志的記号への移行、つまり、叫びのような非意志的発声運動が意志的性格を獲得するに至るプロセスについて繰り返し説明を試みるのだが、その際、必ず幼児の言語習得を引き合いに出す。本能的に発せられた叫びに続いて欲求が充足されるのを繰り返すうち、幼児は自分に聞こえている叫び声が他者にも聞かれていることに気づく。そして、声によって他者を動かしうる自らの「モラルの力能」を感知する、というのである。

様々なテクストを参照してこの「モラルの力能」の含意について詳細に検討した末に、発声運動を原因、それに対する他者の応接を結果とする因果的認識として規定されていると結論づけるに至った。さらに、ビランの反省概念はこの因果的認識を含意することから、呼びかけと応答というコミュニケーションの根源的な次元の成立に、反省が深く関わっていることが明らかとなった。

もっぱら自己認識の能力として捉えられてきたビラン哲学における反省が、モラルの成立にも寄与するものであることをテクストに即して明確にした点に本研究の意義と独自性がある。

成果は、論文「声を介したコミュニケーションを可能にするもの　―メーヌ・ド・ビランの記号論における統覚と「モラルの力能」」にまとめ、発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２　件）

越門勝彦「価値の共約不可能性と選択」（東北大学文学部倫理学研究室編『モラリア』第18巻、2011年、32頁～51頁）

越門勝彦「声を介したコミュニケーションを可能にするもの　―メーヌ・ド・ビランの記号論における統覚と「モラルの力能」」（哲学会編『哲学雑誌』第127巻、有斐閣、2012年、98頁～107頁）

〔学会発表〕（計１　件）

越門勝彦 *Les signes et ce qui est volontaire chez Maine de Biran*（L'Association des Societes de Philosophie de langue francais 中間学会、2013年3月30日、京都大学）

〔図書〕（計１　件）

越門勝彦「倫理に向かう哲学」（松永澄夫・鈴木泉編『哲学への誘いⅠ　哲学の立ち位置』、東信堂、172頁～214頁）

６．研究組織
(1)研究代表者
越門　勝彦　（KOEMON　KATSUHIKO）
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号：80565391